

第22回理学懇話会のご意見

プレゼンテーション「理学研究科の現状報告」について

共創の体験が積み重なることでダイバーシティの問題は克服されると思う。時間はかかるが、科学を愛し、高い志を持った女子学生を集め、女性のメンターなどをおして積極的に育むことで突破口が開かれると考える。

「教養」「人格」「感性」などがキーワードになりそうに感じました。論文博士の制度をもっと活用して「阪大の博士」を増やしても良いように思います。

生涯賃金が博士の方が上ということ、意外でした。その根拠や海外での博士の価値を含めて、学生さんのモチベーションが上がる資料が出てくると良いと思います。

国際共著論文比率を阪大内部の平均値と比較しておられます。やはり、科学技術・学術政策研究所のデータのように、国内外や日本の大学との比較データを解析して、阪大理の位置づけが明確になると対応策も考えられるのではないのでしょうか。

理学部としては以後研究者になる場合と、企業内研究者になる場合とに分かれるのですが、自然科学研究者としての持つべき基盤は同じでしょう。自ら考え研究し論文にまとめ世界に発信する能力は実に価値あるものでしょう。このような視点から博士の資格が得難いものとして世に広めるべきです。

学生の質の問題はコロナ前の前回は指摘があり、危急課題と認識いたしました。「やってみなはれ」「自由闊達にして愉快なる理想工場」「やってみせんで、何がわかる」の先人の言葉への回帰が叫ばれています。

海外大学、研究機関との様々な取り組みについてはお話がありましたが、同じ課題を抱えている国内他大学(理学部同志とか)との協働の取り組み例が少ないと感じました。

プレゼンテーション「大阪大学の学生生活調査結果からわかること」について

修士の学生が就職活動で長期にわたって研究を中断することも日本の損失です。コロナ禍以前でも学会発表の経験がない学生が半分以上いることもこのような状況の反映かもしれません。阪大だけの課題ではありませんが、研究に集中できる環境整備が重要でしょう。

指導する先生方が、ご自身の判断ではなく、相談できる専門家をコンサルとして連携できるようにしておく必要があるでしょう。

経済的あるいは、精神的な困難、昔からあります。企業とのスポンサーシップの下に奨学金、インターンシップがよい効果を生むのではないかとおもいます。

新聞報道等で耳にするほど、新型コロナの影響は大きくないことに安心した。博士課程進学率の低迷に関しては、学位取得後の将来像を正しく伝えるなど、博士課程進学への動機付けが重要であると感じた。

早く社会に出て活躍したい調査結果がある一方で、博士の魅力を伝えないと指摘がありました。社会人になってから学びなおしをする欧米と、卒業してから社会人になる日本の仕組みの場合、博士の目的が(アカデミアに残らない限り)経済動向に翻弄される可能性を感じています。

「課題を見つけ、自立的かつ柔軟な発想で解決する」研究・開発の哲学は、自然科学の基礎研究者にも通底するものがある。

研究能力に加えて人間力(主体性、傾聴力、柔軟性等)が重要とのこと、大学で教養教育を充実させる必要があると感じました。一般教育ではなく教養教育、あらゆる専攻の学生に対して専門性の高い教員が夢のある研究について分かりやすく熱弁をふるっていただきたいと思いました。

「総合的な人間力が問われている」。本質的な指摘をされたプレゼンで参考になるところが多くありました。見える化、感じる化ができる自己完結の小規模活動の有効性が、従来の延長線では解決できない課題への対応が示唆されました。人間力はこのような環境、体験の中で結果として育まれるものではないかと感じさせられました。

企業が求める人材として、柔軟性が重要というのは大いに同意します。

プレゼンテーション「最新の研究トピックス」について

宇宙科学と物理・化学・生物との融合研究は、自然科学の新たなフロンティアを切り開く重要な取り組みである。寺田先生のご発表は、その実践を垣間見せてくれるものであった。

今後、博士課程を目指す学生が増えるかどうかは、学生からみて、教員・研究者の皆様がどれだけ輝いているかにかかっているかと思います。

サイエンスならではのワクワクするプレゼンは、(じつは)およそ多くの企業の経営者にはできないものです。人類の世界観まで広げて語れるひとがほとんどいないからです。

大変面白く、仮説の展開と根拠の結び付けが心地よかったです。虫の目か、鳥の目か、現象をとらえる際の時間のスパン視点を変える示唆をいただきました。

理学懇話会全体に関するご意見・ご感想

米国の大学が実現したような巨額の投資を生み出す仕組み作りを考えるのか、一歩ずつ解決策を積み上げていくのか、選択肢がいろいろあると思います。

日本の中で阪大だけが生き残る・国際的な存在感を上げるための斬新なアイデア・ブレインストーミングみたいな意見交換の時間もあってよいのかなと思いました。

事前にテーマを告知したうえで、ディスカッションの時間を増やされてははいかがでしょうか。

研究力の源泉である教員・研究者の体制に焦点を絞ってみてはどうでしょうか。優秀な人材の獲得・維持の方法、効率的な組織運営方法など、民間の経験や知恵も多少は参考になるかと思っています。

質の高い議論をどんどんしていきたいです。そして、考えたらすぐ意思決定して行動。失敗したらまた考えてすぐ意思決定して行動。研究にも負けないスピード感で、研究活動の環境自体も構築していきましょう。
学生の方にも参加して頂いてもいいのではないのでしょうか。

産業界から理学研究に期待すること

事務的なことを減らして熱意のある教育と突拍子もない研究に励んでほしい。

もう少しHPを充実させてはいかがかと思います。

基礎研究者も、企業の事業者や営業マンとも話をする機会があると良いと思います。思いがけない刺激、ヒントが得られることがあるはずです。

ニーズを追わないで頂きたい。

本質をとらえているということが非常に重要ですし、理学的な思考に基づかない話は聞いていても面白くありません。

「その他」

企業の中堅社員なども交えてやればさらに活発な意見が出ると思います。

対面で実施されてよかったです。

就職対策のキャリア支援ではなく、広義の人生のキャリアデザインに対する意識(生きがい)を学生にもってもらうことも大切だと思います。